

---

## Out Of Place Artifacts

赤影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Out Of Place Artifacts

### 【Nコード】

N0974D

### 【作者名】

赤影

### 【あらすじ】

オーパーツとは”Out Of Place Artifacts”の略で、日本語では「場違いな遺物」「時代錯誤遺物」の意。公式測定された年代当時の科学技術をはるかに超えたオーパーツは現在の歴史学では説明できないのです。この世界のミステリーと一緒に楽しみましょう。

## オーパーツ

まえおき

オーパーツとは”Out Of Place Artifacts”の略で、日本語では「場違いな遺物」「時代錯誤遺物」の意。発掘された遺跡や遺物が、その当時では考えられないほど高度な技術が使っているものやありえない物、又は、近代において発見された知識が、何百年も前の遺物に書かれていたものなどです。

いままで、人類の文明の始まりは世界4大文明（エジプト文明、黄河文明、インダス文明、メソポタミア文明）だと考えられていました。

しかし、この定説そのものがすでに疑問視されてきています。なぜかというところの常識を疑うに足る証拠が近年、続々と発見されてきているからです。

公式測定された年代当時の科学技術をはるかに超えたオーパーツは現在の歴史学では説明できないのです。この世界のミステリーを一緒に楽しみましょう。

## ピリ・レイスの地図

1929年、かつてトルコの首都であったコンスタンチノープル（現イスタンブール）のトプカプ宮殿内部から不思議な地図が発見さ

れた。

地図はアフリカ・カモシカの皮に記された断片二枚で、1528年の日付けもあり、ピリ・イブン・ハジ・メメッドの署名があった。ピリ・レイス（レイスは船長という意味）の地図とよばれるこの地図には我々が学んできた歴史ではつじつまが合わない2つの大きな謎がある。

1、 その時代発見されていないはずの南極大陸、そして紀元前1万3000年から紀元前4000年の間の南極に氷が無い時代で海面が現在よりも低い時代の地形を描いている事。  
2、 高度26,000kmというスペースシャトルの8倍以上の高度から見たのと同じ縮尺の地図だという事。

南極大陸が始めて発見されたのは約180年前の1818年、トルコの海賊達が活躍していた500年前はまだ南極大陸の存在すら知られていなかったのにも思っていると、尚も不思議な事が発見された。

地図の付記に「コピー」と書き残こされていた。  
コピーということはもっと前に参考にされた地図があるということになる。

彼がこの地図の制作にあたって約2,000年前の「マツパ・ムンデイス」と呼ばれるアレキサンダー大王の時代の「人間が住むあらゆる世界が示された地図」を参考にすると書き残している。太古に描かれた地図がコピーをくり返して出来上がったのがピリ・レイスの地図なのだ。

地質学上の証拠にしたがうと、南極大陸に氷が無い時代は紀元前1万3000年から紀元前4000年の間（今から1万5000年前

（6000年前の間）となる。

1万数千年前の時代は、ラスコーの洞窟にウシなどの動物が描かれていた時代で人類は原始的な生活をしていたはずだ。

最古の文明といわれているシュメールよりさらに1万年前である。文明が無いと言われてきた時代にスペースシャトルの8倍以上の高さから見た地形をどうやって描いたのか謎がますます深まる。

ピリ・レイスの地図の外にも古代の地図が発見されていた。

ピリ・レイスの生きていた時代よりさらに約2000年前の1339年のダルサートのポルトラノと呼ばれる地図はヨーロッパ、地中海を正確に描き、アイルランドからドン川に至るまでの精度は16世紀になつても誰も知らなかった知識をもとに描かれていた。

そのポルトラノの作成者達は、あの消え失せた世界最初の大図書館アレクサンドリア図書館に保管されていた地図やマケドニアのアレクサンダー時代の地図を模写したと書き残している。

このことはピリ・レイスの地図も同様だった。

2、200年も前、地球の全周を数パーセントの誤差で測定したエラトステネスはアレクサンドリア図書館の館長だった。技術的天才だったアルキメデス、「自動機械」という本を書いたヘロン、知識は心臓ではなく脳に宿っていることを明らかにしたヘロフィロス、幾何学を体系化したユークリッド、星座図を作ったヒツパルコスも、皆この図書館の常連だった。

アレクサンドリア図書館ここが原点なのだ。

アレクサンドリア図書館、その70万冊ともいわれた蔵書の中に、古地図の原図があったのだ。

これら一連の古地図が物語っていることは、かつて、超古代とよばれる非常に古い時代に、全世界に及ぶ大文明が存在し、地図作成者

たちが統一された技術水準をもって、同一の方法で、同程度の数学知識を持って、おそらくは同じ器具類を用いて全世界の地図を作成したのではないだろうか。

氷河期に宇宙空間を飛行出来るような高度に発達した文明が地球のどこかで繁栄していたが衰退し、その英知の一部がシュメールへと受け継がれ、やがてアレクサンドリア図書館に辿り着いた。

その古地図の原図のコピーを入手しピリ・レイスの地図を描いたのだ。

最古の文明といわれているシュメールは謎の多い文明といわれている。この文明は、現在の文明のすべての基礎をもっていた。神殿の建築技術、船や車輪による輸送手段から芸術的な衣類、装飾品、調理法、法律、裁判制度、音楽、楽器などあらゆるものが揃った文明だったのだ。

そして、奇妙なことにそれに続く他の文明（バビロニア、エジプト、ローマ、インダスなど）より進化していた。

後の文明より前の文明が進化していたとは、変な話しであって、シュメール以前に現代より進化した文明があったとしか考えられない。僕達の文明は5000年くらいでここまでなったのだから、5000年という年月で現代より優れた文明があったのかもしれない。

その一部がアレクサンドリア図書館に残されていたのだ。

後は核戦争のような物が起きて跡形も無く消えてしまったのかもしれない。

マヤ文明では5000年が一区切りとされ、西暦2015年で破滅がくると言われている。

地球を痛めつけている僕達も一度消えて、又猿から進化する道を通るのかもしれない。

古代に現代より優れた文明があったのではないかと思ったが、ピリ・

レイスの地図を見ると、「本当に正確なのかな」という疑問を持った。

地図をなぞってみると、大西洋、アフリカ、南アメリカなどと思うが僕の知識の中の世界地図とはかけ離れている。

南アメリカと南極大陸が陸つづきのようにも見える。キューバだと思いが形も違う。いくつか島も点在するが、そんなところに島は無い。

とてもスペースシャトル以上の技術を持った人々が作成した物をコピーしたとは思えない。

ピリ・レイスは3年の年月をかけて33枚の地図を作成した。当時アフリカ・カモシカの皮なる紙は高価だったらしい。

この地図は長方形でなく、左下が欠けている。始めから左下の欠けている紙で作成して、南アフリカを書ききれず90度に曲げ書いたのではないのか。それでも目的の航海する為の地図だとしたら、支障はないはずだ。

正確でなく、南極も実は南アフリカだった。そんな事かもしれない！

では外の古代地図はどうだろうか！

南極大陸が描かれているとしてよく紹介されるのは、オロンテウスの地図（1531年作成）、メルカトルの地図（1538年作成）、ビュアツシュの地図（1737年作成）、ミリティウスの地図（1590年作成）、フランチェスコ・ロザエリの地図（1508年作成）などがある

これらの地図は、いずれも南極大陸が発見された1818年よりも前に作成されている。

やはり古代に現代より優れた文明はあったのだろうか！

オロンテウスの地図、メルカトルの地図、ビュアツシュの地図、ミリティウスの地図、フランチェスコ・ロザエリの地図、これらの地図は、いずれも南極大陸が発見された1818年よりも前に作成されているとされているが、だが実際に地図を見ると、何か足りない気がしないだろうか？

地図をよく見ると、そこには、ある文字が書かれているのに気付く。フランチェスコ・ロザエリの地図と、メルカトルの地図は文字がつぶれて判別できないが、残りの3つには上に示した文字が書かれている。

「テラ・オーストラリス」という文字だ。

当時は、まだヨーロッパ人はオーストラリアを発見していないが、1522年、フェルディナンド・マゼラン一行は、オーストラリアに上陸こそしていないが、近くまでは行っていたのだ。

メルカトルの地図には南極大陸と思われるところは「マゼラン地方」と書かれてある。

オロンテウスの地図には最近発見された「南の土地」と書かれてある。地図に描かれていた南極は、超古代文明人の知識を参考にしたのではなく、マゼランたちの情報を参考にしてオーストラリア大陸を想像で描いたものだ。

疑問なのは、「後の文明より前の文明が進化していたとは、変な話なのであって、シュメール以前に現代より進化した文明があったとしても考えられない。」文明は引き継がれたのではなく、違う場所で生まれ、そして消滅していったと考えれば辻つまが合う。

## 結論

ピリ・レイスの地図は南アメリカ、他の古代地図は想像のオーストラリア大陸であって、シュメール以前に現代より進化した文明は存

在しなかった。

ピリ・レイスの地図は僕のオーパーツのリストから外そう。

## ヘッジスの水晶ドクロ

### ヘッジスの水晶ドクロ

1927年、探検家のフレデリック・アルバート・ミッチェル・ヘッジスと養女のアンナは、マヤ文明の遺跡を発掘していた。

アンナの17歳の誕生日、ルバアンタンという滅び去った町の廃墟にあった祭壇の下で、何か光り輝くものが埋まっているのをアンナが発見した。掘り起こしてみると、それは水晶で作られた人間の頭蓋骨だった。

水晶でできた非常にリアルな人間の頭蓋骨で、発見者の名前をとってヘッジスの水晶ドクロ（ヘッジス・スカル）と呼ばれている。

大きさは重さ約5k、高さと幅は12・5cm、長さが17・5cmで女性の頭蓋骨と推測されている。

モンタージュを作成したところ、鼻の部分が比較的大きく下顎が丸みを帯びた人物、つまり古代マヤ人に似ていることがわかった。

しかし、このヘッジスの水晶ドクロには2つの謎がある。

1、マヤ文明の遺跡から出土した工具は、石器や動物の骨から作られたものしか発見されておらず、水晶は、ダイヤモンド・ルビー・サファイヤ・トパーズに続いて硬く、石器製の工具での加工は難しい。人の手で砂と石で研磨したとしたら、150年から300年かかると予想され、当時の技術でドクロを作ったとは考えられない事。

2、この水晶ドクロは解剖学的に見てかなり正確に人間の頭蓋骨を再現しており下顎も取り外し出来るようになっていて。

水晶ドクロのすごい点は型の正確さだけでなくドクロの下から光をあてると、ドクロ全体が炎に包まれているように光ったり水晶が虹

のように光を放つたり、目の部分が発光したりするというプリズム効果も考えられている点で他にも文字を書いた紙をドクロの下に置くと眼球部分から文字が読める、真上から覗くと下の文字が拡大されて見えるという。

これは水晶だから起きる現象ではなく水晶のプリズム効果・屈折率の知識がないと産み出せない技術だという。水晶の光の屈折率は複雑で、現在の技術を用いてもこれと同じ物を作るのは不可能に近いという事。

古代マヤ人たちは、このドクロに不思議な力が秘められていると信じ、儀式の際、神官が神の聞くためや病気の治療に使用されたという。伝説の一説では「水晶ドクロは全部で13個あり、全てが再び一ヶ所に集結した時、宇宙の謎が暴かれ人類を救う」とされている。そして実際、別の7個の水晶ドクロが発見されているのだ。

今世紀に入り幾度も年代測定を行ったが、作った年代を確定することはできなかつたのである。ますます謎が深まるばかりであります。

オーパーツとされるヘッジスの水晶ドクロは、調べていくと何故か怪しいところが多くでてくる。

先ず、発見当時アンナはルバアンタンにいなかったのではという疑問がある。

1、ヘッジス一行が探検の際に撮った写真がいくつも残っているのだが、その中にアンナが写っている写真が一枚もない。

2、大発見であるはずの水晶ドクロの写真も一枚もない。

3、探検の主要メンバーのひとりであったトーマス・ガン博士が、1931年に『マヤの歴史』という本を出版しているが、その中に

アンナ・ミツチエル・ヘッジスの名前はもちろん、水晶ドクロに関する記述も一切ない。

4、ルバアンタンで発掘調査を行い、この遺跡の全貌を解説した本を出版したノーマン・ハモンド博士も、「あらゆる文書記録を見るかぎり、歴然としているのですが、彼女がルバアンタン現地に行ったというのは絶対にありえないことなのです」と言い切っている。

5、アンナが水晶ドクロを発見したのは1927年、自分の17歳の誕生日の当日だと語っているが、ヘッジス一行は1926年にイギリスに帰国している。

アンナ・ミツチエル・ヘッジスは発見現場ルバアンタンにいなかったのだ。

その場にはいないのに発見できるわけが無い！

しかし、水晶ドクロが実在していることは確かである。

では、ルバアンタンで発見していないとすれば、水晶ドクロは一体どこで手に入れたのだろうか？

水晶ドクロは一体どこで手に入れたのだろうか？

実は、1943年、シドニー・バーニーという美術商が、問題の水晶ドクロをロンドンのサザビーズに競売に出したが、希望していた価格では売れなかったため、自己落札して買い戻し、1944年にミツチエル・ヘッジスが400ポンドで水晶ドクロを買い取った。このことはロンドン美術館の記録にも残っており、アンナ自身も認めているが、借金のカタに水晶ドクロを取られてしまい、競売に出たので慌てて買い戻した、との事。

しかし1936年に、大富豪だったミツチエル・ヘッジスの父親が死んで、莫大な財産を彼が譲り受けている。

借金する必要もないし、借金のカタというのは考えられない。

では、ヘッジスの水晶ドクロは何時頃何所で作られたものなのだろうか！

伝説の13個のドクロのうちの1つと言われている、「ブリティッシュ・スカル」が現在イギリスの大英博物館に所蔵されている。

このブリティッシュ・スカルの持ち主はユージン・ボバンという古美術収集家で、彼は1886年にドクロをニューヨークのオークションに出した。

その年の12月、ニューヨークの宝石店「ティファニー」の共同経営者だった、エリスという人物がドクロを買い取った。その後、「ティファニー」からジョン・エヴァンズがドクロ買い取り、それを大英博物館に売ったという。

ユージン・ボバンが水晶を入手した先は、ドイツのイーダル・オーベルシュタインという町だ。この町は中世以来、世界的に知られた石細工の中心地で、多くの水晶加工職人がいるのだ。

水晶ドクロを作るには、現代の技術をもってしても不可能だと言われているが、この町ではもつと精巧な水晶ドクロが今でも作られ、街の片隅で普通に売られているらしい。

1996年に大英博物館で行われた調査で、ブリティッシュ・スカルは19世紀以降に作られたという分析結果が出た。

ヘッジスの水晶ドクロも19世紀この街のどこかで作られたのではないだろうか！

最近、ヘッジスの水晶ドクロの下顎の部分に金属加工の跡も見つかっている。

アンナ・ミッチェル・ヘッジスはロマンと想像力の逞しい女性だったんだろ。只、少し嘘つきだった。

ヘッジスの水晶ドクロは、僕のオーパーツのリストから外そう！

## 黄金ジェット

### 黄金ジェット

UFO研究者や宇宙考古学者達が、古代に宇宙人がやって来て、地球に文明を築き上げたと言主張する時、取り上げるのがコロンビアの首都ボコダにある国立銀行黄金博物館に展示されている、「黄金ジェット」だ。

「黄金ジェット」は紀元前200から紀元800年頃に栄えたプレ・コロンビア文化の装身具で、ジェット機の模型だと言われている。数多く発掘された物は、平均的な長さは約6センチ、幅約5センチ、高さ1.5センチ程度で比較的小さい。

「黄金ジェット」は、航空機という機首・コックピット・主翼・胴体・垂直尾翼・水平尾翼が見事に揃っている。

航空研究所の専門家は、航空力学的に見て理に適っており、超高速飛行が可能だと判断した。

実際レプリカを造り飛ばすと、見事に飛行したそうだ。

当時のコストリ力で高度な飛行技術が発達し、航空機を製造し大空をとんでいたのだろうか！

そうしてナスカの地上絵も関係あるのだろうか！

ますます謎が深まるばかりである。

黄金ジェットだけを見ていると分からないかもしれないが、同じような黄金製の装身具は全て「動物形態像」なのだ。

発見当初は鳥か蛾、あるいは飛び魚を象ったものと思われていた。

しかし、動物形態像は、カエルや犬、鳥、ジャガーなどのように、模倣された動物がすぐにそれと分かる造りになっているのに対し、黄金シャトルに限っては、はっきり特定できるほど似通った動物がいなかったのだ。

特定できないからといって、古代のデルタ型戦闘機が動物形態像に混じって模されていると考えるのはかなり無理がある。

黄金ジェットには口と思われる切れ込みや目玉に相当する二つの突起物があり、何らかの動物を模した物であることは明白だからだ。黄金ジェットと寸分違わぬ動物は、すでにアマゾン川流域で発見されているのである。

その動物はプレコと呼ばれる魚類である。

日本で言うなら「ナマズ」に当たるが、南米産のプレコは模様が非常にハデで、鑑賞魚としても十分楽しめる。黄金の装身具にする価値は十分にあると言えるだろう。

形は、胸ビレが巨大なデルタ型をしていて、尾ヒレは真上に大きくそそり立っている。

頭から先は楕円形になっていて、背ビレは、ちょうど黄金ジェットの突起部分にあたる。さらに、腹ビレは胸ビレと同じく、飛行機の後翼のように左右に大きく開いているのである。

黄金ジェットの正体はまぎれもなく、プレコと言う魚だ。

黄金ジェットも僕のオーパーツのリストから外そう。

## カブレラ・ストーン

1961年、それは南米ペルーのアンデス地方にとって数十年ぶりの大豪雨だった。

突然の大奔流となったイカ川はオクカへ砂漠の砂を海へと押し流し、それとともに深い地層から奇妙な絵が彫りこまれた石が発見された。

この石の奇妙なところは、南米では生息するはずのない動植物や、今から6500万年前に絶滅したとされている恐竜の絵が描かれていたことだ。

また天文学の知識がなければ描くことができない絵や、心臓移植などの外科手術、大陸が分裂し移動している絵など、高度な文明を持つていたことを示唆する石も見つかっている。

この石を1万1000個も収集し、私設博物館まで作ったジャンヴィエル・カブレラ・ダルケア博士（「カブレラ・ストーン」は彼の名にちなんでいる）が1967年6月、マウリシオ・ホツホシルト鉱業会社に石の分析を依頼しており、同社随一の地質学者エリック・ウルフ博士に分析を依頼した結果、1万2000年以上前という鑑定結果が出た。

結果に驚いたのはウルフ博士自身だ。彼はカブレラ・ストーンを、ボン大学鉱物学・岩石学研究所のヨーゼフ・フレツヒエン教授に送ると、自分の鑑定とは別に、彼にも鑑定をしてもらった。

結果はやはり驚くべきものだった。ここでも少なくとも1万2000年以上前という鑑定結果が出たのだ！

カブレラ・ストーンは間違いなく真正銘のオーパーツなのかもしれない。

1万2000年前に高度の文明を持つ人類がいて、恐竜とも同じ時代にいたと証明している、不思議なカブレラ・ストーン。本当に1万2000年前の鑑定は正しいのだろうか？

2年程前だったろうか、「神の手を持つ男」と言われた考古学者が、朝早く発掘先で土偶を埋めて話題になった事件を知っているだろうか！

彼は自分が発見したように細工していたのだ。

この事件で日本史の教科書を変えなければならぬほどになった。

土偶や石のような「無機物」は年代測定ではおなじみの「炭素14法」は使えない。

こんな事が普通考えられないが、出てきた石の年代鑑定するのは非常に難しく、大抵はその周りの地層で判断するのだ。

その年代の地層の中から出てきたものは、その年代と判断するのだ。神の手を持つ男もこのことを利用したのだ。

カブレラ・ストーンの年代測定は一体どういう方法で行われたのだろうか？

実際に用いられた方法は、「石の表面を覆う酸化層を分析する」という方法だった。

しかしこの分析法には大きな欠点がある。

発掘された現場の状況や、地層の状態、発掘されてからの保存状況など、詳しいことが分からなければ正確な年代測定は不可能なのだ。この鑑定法では、石を火の中で焼くことで古い年代を出すことが可能である。

なんか怪しくなってきた。  
もっと調べる必要があるそうだ。

1977年、イギリスのBBCテレビでドキュメンタリー番組が制作された。

この番組ではカブレラ・ストーン真相を探り、ある1人の農民を見つけた。

彼の名前はバジリオ・ウチュヤだ。

バジリオ・ウチュヤは妻のイルマ・グチエレス・デ・アパルカナと共謀して、カブレラ・ストーンにニセモノを作ったと告白したのだ。ウチュヤによれば、石は歯医者が使ったドリルを使って削っていたという。また色は靴墨を使って黒くし、ロバや牛の糞の中で焼くことで古色蒼然とした古い外観に見せかけていたという。

そして、この糞の中でカブレラ・ストーンを燃やすカマドも発見された。

BBCテレビのスタッフがカブレラ・ストーンを貰って帰り、ロンドンの地質科学研究所で詳しい調査をしてもらったところ、彫刻の切り口がシャープすぎて、古いものなら当然あるはずの磨耗の類が無いこと、古びて見せる為に着色をした跡が見つかったことなどから、「比較的最近作られた偽造品である」との鑑定結果を出している。

これもオーパーツではなかった。

しかし、気になる話がある。

ウチュヤは盗掘の疑いをかけられ警察の取調べを受けたことになった時、カブレラ博士とは石を売り買いする仲だったウチュヤは、カブレラ博士のところ相談に行った。

相談を受けた博士は、「以後のこともあるので、自分のところへ持ち込んでいる石は、あなた自身が彫った偽物だということにしてはどうか」提案した。

ウチユヤはその案を受け入れたが、偽物で押し通すには、彼自身がそれを作る技術を身につける必要があった。それが、ウチユヤが偽物作りを手がけるキツカケになったのだという。そしてその後、ニセモノ作りが金になることを知ったウチユヤは、発掘の合間に副業に精を出すようになっていったという。

だがウチユヤは、継続的に買い求めてくれるカブレラ博士だけには、オクカへ砂漠から探し出した本物を渡し、ニセモノを渡すことはなかったというのだ。

この話は事実なのか分らないが、カブレラ博士の所有する10000個のカブレラ・ストーンの中には本物があるのかもしれない。

## パレンケの石棺

1952年6月15日、メキシコのチアバス州にあるパレンケで、考古学者のアルバート・ルース・ルイリエルが古代マヤの遺跡「碑銘の神殿」の地下から、奇妙な絵が彫られた石棺を発見した。

この石棺は、縦3メートル、横2.1メートル、高さ1.1メートル、重さは5トンにもなる一枚の岩をくりぬいたもので、驚いたこととに、表面には古代の宇宙飛行士と思われる人物がロケットを操縦している姿を描いたものが彫られていた。

現代の宇宙飛行士がロケットに乗っている絵とそっくりこのような図柄だ。

最下部の奇妙な模様は、推進ユニットから噴出する炎とガスを表していると思えない

ボディースーツのようなものを着ており、袖口とズボンの裾の部分には丁寧に仕上げられたカフスがつけられている。

男は背中と腿を支える座席に楽な姿勢で座り、首の後部は気持ちよさそうに頭置きに預け集中して前方を見つめている。

両手は動作中のように、あたかもレバーかコントロール盤を操作しているかのようであり、裸の脚を折り曲げて軽く引き寄せている。

人類が初めて宇宙に飛び立ったのは20世紀の半ばだ、石棺に描かれているのは「古代の宇宙飛行士」なのか！

パレンケの石棺を知るには、先ずパレンケ王朝遺跡を紹介しよう！パレンケ遺跡はマヤ文明の最大の足跡と言われている。現在のメキシコのジャングルから突然現れたパレンケ王朝は紀元後431年、始まったようだ。

パレンケの石棺は、この遺跡のパカル王の墓である「碑銘の神殿」

から発見された。

勿論、石棺の中にはパカル王が「ヒスイの仮面」を付けて眠っていた。

古代では最高の宝石とされていたヒスイで出来た仮面は、発見当時はバラバラになっていた。

その後復元されて、メキシコシティーの人類学博物館のマヤ室に飾られていた時価数百億と言われている「ヒスイの仮面」は、1985年12月24日のクリスマス・イブの夜、通気孔から進入したサントクロースのドロポーによって、「アステカ黒曜石の壺」(34億円)や「オアハカのマスク」等とともに盗まれ、メキシコ中が大騒ぎになった。

しかし、4年半ほどして、犯人は呆気なく捕まった。警察官が何気なく尋問した挙動不審者の自宅ガレージから、盗まれた秘宝が発見されたのである。いくつかの宝石類は海外で売られたらしいが、さすがに有名な秘宝は持ち出すことが出来なかったようで「ヒスイの仮面」無事であった。

パカル王は、615年わずか12歳で即位し、68年間に渡ってパレンケを支配したとされている。パカル王の時代がパレンケ王朝の最も繁栄した時代であったようだ。

パレンケ王朝遺跡には、「碑銘の神殿」のはす向かいには「宮殿」があり、真ん中あたりに、天体観測に使用していたと思われる4階建ての塔が見える。小さな橋を渡ってさらに進むと、広場に出る。広場を取り囲むようにパカル王の息子チャン・バールム王によって建造された「十字の神殿」、「葉の十字の神殿」、「太陽の神殿」が建っている。

宇宙まで行くことの高い技術が、このパレンケ王朝にあったのだらうか！

石棺の蓋のレリーフの主要なパーツを抜き出してみる。

左図の「四分交差の支配者の記章」に腰掛けている人物は、石棺の中に埋葬されていた人物と同じ「パカル王」であることが碑文の解読によって明らかになった。

レリーフでは胎児のような姿勢をとっていることについては、マヤ文明では夕日と共に地下世界に下り、そこで新たに生まれ変わるという考え方によるという。

マヤ文明では、死者の世界である地下、神々と先祖のいる天上、その中間である我々人間のいる地上という、3つの平行した世界という概念があった。

横にした時、ロケットの炎のように見えたものは、地下世界の守護者である「地の怪物」が大きく口を開けてパカル王を飲み込もうとしている場面を絵にしたものであり、ロケットのように見える部分は、縦にすると十字架であることがわかる。

この十字架は上でも示したとおり、他の神殿のレリーフにも中心に描かれているもので、「生命の樹」と呼ばれるトウモロコシを様式化したものだ。

この生命の樹に絡んで枝のように垂れているのは「双頭の蛇」で、頂上にとまっているのは、マヤ文明の聖なる鳥「ケツアルコアトル」である。この鳥は天上の世界を表しているとされ、他の神殿のレリーフにもパカル王のものと同じく、生命の樹の頂上にとまっている姿が描かれている。

おそらく、このレリーフに描かれているパカル王は、死に際して地

下世界と天上世界の間で宙吊りになっている状態を表されているだろう。しかし地の怪物に今にも飲み込まれそうになっているにもかかわらず、王は天上に向かって伸びている生命の樹と、その頂上にとまる聖なる鳥を見つめているのだ。

パレンケの石棺は横が見るのではなく、縦から見る見方が本当だ。石棺があった「碑銘の神殿」の地下の入り口から見た石棺の置き方が、そもそも縦である。

パレンケの石棺は、オーパーツとは言える物ではない。

## 聖徳太子の地球儀

日本にもオーパーツは存在した。

兵庫県揖保郡の斑鳩寺いかるがてらに伝わる、聖徳太子が作ったとされる地球儀である。

この寺は推古14年（西暦606年）に聖徳太子によって建てられたといわれる寺で、太子ゆかりの品が数多く所蔵されている。

これらの所蔵品は、「常什物帳」という目録の中に聖徳太子ゆかりの宝物と並び「地中石」と記載されていることから、聖徳太子が作ったとされる地球儀。

大きさはソフトボールくらいで、家の壁を作るのに使われていた粘土状の土で作られている。

この地球儀には日本、ユーラシア、アフリカさらに南北アメリカ大陸が刻まれており、なんと、南極大陸まで刻まれているのだ。

当時、聖徳太子の時代は飛鳥時代、勿論南極大陸は発見されていなかった。

また、この地球儀にはムー大陸まで刻まれているそうです。なんと不思議な地球儀。

本当のオーパーツは日本にあったのか！

この地球儀は本当に聖徳太子が作ったものなのか？

コベルコ科学研究所で地球儀の年代を特定するために鑑定した。

分析の結果、炭酸カルシウムの結晶である「カルサイト」と、「スサ」と呼ばれる繊維質が発見された。

このことから、地球儀が「漆喰」という方法で作られたものと解かった。

漆喰とは、石灰岩を粉にしたものに水と糊を混ぜ粘土状にしたもの

で、古くから家の壁を作る建材として使われている。さらに、漆喰に使用されている糊の成分を分析したところ、江戸時代に使われ始めた海藻糊が検出された。

この結果、この謎の地球儀は聖徳太子が作ったものではなく、江戸時代以降に作られ、斑鳩寺に持ち込まれたものだとは推測できる。

この地球儀が江戸時代に作られたものなのだ。これもオーパーツではなかった。

では、この地球儀は誰が作ったものなのか？

石灰や海藻糊は薬として使用されていたことから、医者が作った可能性が高いという。

さらに、地球儀の表面に残されている地名とおぼしき謎の文字に注目した。

南極と思われる部分に書かれた文字、1文字目は「墨」、2文字目は「瓦」、3文字目は古代中国の仏教の教典に見られる「臘」という文字。そして、4文字目5文字目は消えかかっていたが、「さんずい」「ちから」の部首を使用し、合計5文字で構成されているという。そこで、この事実をもとに謎の文字を調査したところ、「墨<sup>メ</sup>瓦臘<sup>カ</sup>泥加」と書かれていることが判明した。

墨瓦臘泥加とは、古代ギリシャ時代に「南半球には巨大な未知なる大陸が存在する」といわれた架空の大陸を意味する。

名前の由来は、世界一周を成し遂げたマゼランのスペイン語名から名付けられた。日本には1592年以降、ポルトガルの宣教師により伝えられたという。

江戸時代の医者、「墨瓦臘泥加」という文字の書かれた地図に関わりのある人物で、寺島良安という人物が浮かび上がった。

江戸期に活躍した大阪の医者で、日本初の百科辞典「和漢三才図会」を編纂した人物。

その「和漢三才図会」の中に「山海輿地図」という地球の絵を載せ

ている。

「山海輿地図」と斑鳩寺の地球儀は墨瓦臘泥メガラニカ加を始めとする様々な大陸の位置が一致していた。

謎の地球儀は江戸時代の医者寺島良安によって作られ、何かしらの理由で斑鳩寺に献上された為、いつしか「聖徳太子の地球儀」と解釈されるようになったのだ。

## コソ加工物

1961年2月13日 アメリカ カルフォルニア州オランチャから北東に10km、コソ山脈で、鉱石収集家の3人ウオレス・レインとヴァージニア・マクシー、マイク・マイクセルが晶洞石を発見した。

マイクは晶洞石の中がどうなっているのかを見ようと、採取してきた石をダイヤのノコギリで、半分に割ったところ、セラミックでできていると思われる直径19ミリほどの機械の一部が現れた。セラミックは化石化したと思われる木の筒に包まれ、真ん中には直径2ミリほどの金属製のシャフトが通っていた。このシャフトは磁石に反応した。

発見した地名から『コソ加工物』と名が付けられた。

国際フォーティアン協会会長のポール・ウィルスや会員のロン・カリスらが、X線写真などを撮影して詳しい調査を行った結果、その化合物は自動車用の点火プラグによく似ていたために、『古代の点火プラグ』ではないかと言われた。

加工物がつくられた年代は地質学者が鑑定を行ったところ、50万年前という鑑定結果を出している。

50年前に高度な文明をもった地球外生物が作ったものだろうか！ X線写真や鑑定結果を見れば、コソ加工物がオーパーツであることは疑いのない事実といえるのではないか！

「コソ加工物」の現物は現在何処にいったか分からなくなっている。その後発見者も一人を残し不明、その一人も口を閉ざしている。

「コソ加工物」はその後調査されなかったのだ。

2000年になりアメリカの懐疑主義団体「パシフィック・ノースウエスト・スケプティクス」のピエール・ストロンバーグとポール・ハインリッヒが、全米を代表する4人の点火プラグコレクターたちに「コソ加工物」のX線写真を添えて問い合わせをした。

アメリカ点火プラグコレクター協会の会長チャド・ウィングダム、同協会副会長のジェフ・バーセル、コレクターのマイク・ヒーリー、点火プラグの私立博物館館長ビル・ボンド、の4名だ。いずれもその道の専門家だ。

結果4人全員が、「コソ加工物は点火プラグに間違いない。しかも1920年代にアメリカのチャンピオン社によって造られた点火プラグに間違いない」という意見で一致した。

4人の間では何の意見交換もされなかったのに、全員の意見が同じだったのだ。

チャド・ウィングダムが実際に1920代にチャンピオン社で造られた点火プラグ2つを添えて詳しい分析結果を出し、ストロンバーグによって、過去に行われた「コソ加工物」の分析結果と見事に一致することも確認された。

晶洞石で「50万年前」という鑑定結果はどうなるのか！

コソ加工物が晶洞石だったのか！

晶洞石は、玉髄と呼ばれる薄い皮によって包まれ、内部の空洞は水晶によって満たされている石である。しかしコソ加工物は、こういった特徴がまったくない。

「地質学者に鑑定してもらったら50万年前という結果が出た」と言ったのは、口を閉ざしているヴァージニア・マクシーの発言なのだ。よく調査すると証拠が無い！



## ネアンデルタール人の弾痕

1921年にアフリカのザンビアでネアンデルタール人の頭蓋骨の化石が発見された。

ネアンデルタール人は人類の祖先と言われるが、10万年前のこの頭蓋骨には不思議な傷後があった。

頭蓋骨の左側側頭部に、弾丸が貫通したような痕跡が発見されたのだ。

ヨーロッパで銃が発明されたのは14世紀である。

なぜ10万年前の化石人骨の頭蓋骨に弾丸の痕が残っているのか？それは本当に弾丸が貫通したような痕跡なのか！

ベルリンの法医学者の専門家が調査に乗り出した。

法医学者の出した結論は、「高速で発射された弾丸が左側頭部に入り、反対側に貫通して破壊された痕らしい」というものであった。

たしかに銃で撃った時に出来る痕と同様に、弾丸が入ったと思われる穴は小さく、弾丸が貫通して抜けたと思われる反対側の損傷は著しく激しいのである。

ネアンデルタール人と拳銃！

誰が考えても変ではないか！まだ石器も覚束無い時代に、それだけ高速に発射できる道具があるはずもない！

その時代未知なる文明を持った生命体が、武器なる物を持って地球にきたとしか考えられない！

これこそはオーパーツなのか！

皆さん！オーパーツシリーズのパターン解ってしまつて、これもオーパーツでなかった！と期待しているでしょうね！  
では結論付けましょう！

Posted by ぶんママ December 07, 2007 22:06

弓矢が刺さつた!!!

もしくは、恐竜にブスつと刺された!!!

絶対に拳銃では無いでしょう…

もしくは、ネアンデルタール人の骨ではなかつた…のかしら？

ぶんママの理論だと「弾丸が入つたと思われる穴は小さく、弾丸が貫通して抜けたと思われる反対側の損傷は著しく激しいのである。」  
と言うことが理論付けられない！

高速で弾丸くらいのおおきさの物が頭蓋骨に当たると、当たつたところはその大きさになり、抜けたところはもっと大きく破損するらしい！

スイカを銃で撃つスローを見た事がないだろうか、破壊されていくのは抜けた方からだ。

でも何かが刺さつたという可能性はあるかもしれない！ギヤートルズになつた気持ちで考えてみた。

弓矢は無い時代だから、石を投げるくらいだろう。

狩で石を投げた時、フラット右側に倒れた。2ヶ月ほど前サルが遊んでいた時、真直ぐな枝が折れて、したの岩の割れ目に45度の角度刺さつたその枝に、頭蓋骨がささつたのではないか！頭蓋骨右から刺さり、脳を貫き左側に出た。左側の抜けた穴は弾丸くらいの穴が開いた。右は岩に打ち破損が激しくなつたと考えられないことも無い！

左から右でなく、右から左と言う考え方だ。

Posted by MEL December 07, 2007 12:37

隕石…は飛躍しすぎなんで…

蒸気とかで高圧で飛んできた石とか…

実際はどうなんでしょう???

鋭い考え方だ。ギヤートルズになった気持ちで考えてみた。

歩いていると火山が噴火した。

崖の上でふらふらしていた岩が落ちた。岩が下に落ちた時、その衝撃で岩が壊れて飛び散った。その時弾丸くらいの大きさの石が高速で飛んできた。

ごめんなさい！結論はよくわかりません。しかし弾痕ではないでしょう！

写真を見るとこんな状態で、法医学者が判断できるのかと思う。

## アルミニウム合金製ベルトバックル

1956年、中国江蘇省にある西暦3世紀・西晋時代の將軍・周処の墳墓から、一体のミイラと共に金属製の帯留めが発見された。

当初、材料の金属は銀や銅だと思われていたが、北京の中国科学院応用物理学研究所と南京大学化学系によって調査された結果、組成はアルミニウム85パーセント、銅10パーセント、マンガン5パーセントの合金であることが判明した。

驚くべきは、この帯留めにアルミニウムが含まれていることである。アルミニウムは地球上に多く存在する物質の一つだが、極めて酸化しやすい（錆びやすい）物質である。

自然のままのアルミニウムは、通常、岩石に含有していたり他の金属と結合しているのだが、これは他の物質と結合しないと酸化して錆びてしまうため単体では存在できないからだ。

そのため、「アルミニウム製の帯留め」を作るには、まず他の物質からアルミニウムだけを分離・抽出しなければならないはずである。しかしその作業には大量の電力が必要なのだ。

現代では大量生産可能となっているアルミニウムだが、アルミニウムが元素記号として発見されたのは1803年、

塩素ガスとカリウムを使って分離する還元法が開発されたのは1827年であり、

電気分解による精錬法が開発されたのは1845年以降である。

それ以前に分離に成功したという記録は存在しない。

古代中国人は、大量の電気を必要とするそのような高度な技術を知っていたのだろうか。

それとも現代の我々もまだ知らない未知の技術によって、アルミニウムを分離していたのだろうか。

謎は深まるばかりである。

金属製の帯留めが1950年代に鑑定され、「アルミニウムが85パーセントも含まれている合金」という結果が出たのは事実である。オーパーツを扱った本では、よく出てくる話だ。

まず知っておきたいのは、周処の墳墓から発見された金属性の帯留めは、完全に近いものは計17個あったということだ。

そして、中国科学院応用物理研究所がアルミニウム合金だと鑑定結果を出したのは、この17個のことではなく、この帯留めと関係あるかどうかもわからない小さな金属片だったのである。

となると、鑑定されたアルミニウム合金は本当に帯留めの一部なのか？ という疑問が浮かぶだろう。中国の清華大学と、東北工学院軽金属冶炼教研室の沈時英氏は、見るからに外観が違い、帯留めの一部かどうかとも怪しい金属片ではなく、外観が同じで帯留めの一部だとわかる金属片の鑑定を行った。

すると最初の鑑定結果と違い、銀で作られているという結果が出たのである。

鑑定を行った沈氏は、アルミニウムだとされた金属片は、近代に盗掘された際に混入した異物なのではないか、という仮説を考えた。

しかしこの仮説に異論を唱えた人物がいた。墳墓の調査担当者であった羅宗真氏である。羅氏によれば、最初に鑑定された金属片は混入物ではありえないとのことだったが、この反論は説得力に欠けた。また再鑑定を行った沈氏からも、見るからに外観が違う金属片などではなく、完全に近い17個の金属製帯留めの鑑定を行うことで決着をつけるべきだ、との反論があった。

そして1964年。沈氏の主張がとおり、周処の墳墓から発見された17個の金属製帯留め（金属片ではなく帯留め自体）の鑑定が行

われた。

結果は、すべて銀で作られているというものだった。

後に北京鋼鉄学院も鑑定を行い、周処の墳墓から発見された帯留めが銀で作られていることを確認している。また、アルミニウムと鑑定された金属片も再鑑定が行われ、20世紀の初頭に作られたものという結果が出ている。

過去に周所の墳墓は盗掘されていた。その時泥棒さんが落としていったものだったとは……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0974d/>

---

Out Of Place Artifacts

2010年10月11日20時19分発行